

KOBEの本棚

—神戸ふるさと文庫だより—

第 111 号 令和 7 年（2025 年） 11 月 20 日

編集・発行 神戸市立中央図書館

〒650-0017 神戸市中央区楠町7-2-1

TEL : (078) 371-3351 FAX : (078) 371-5046

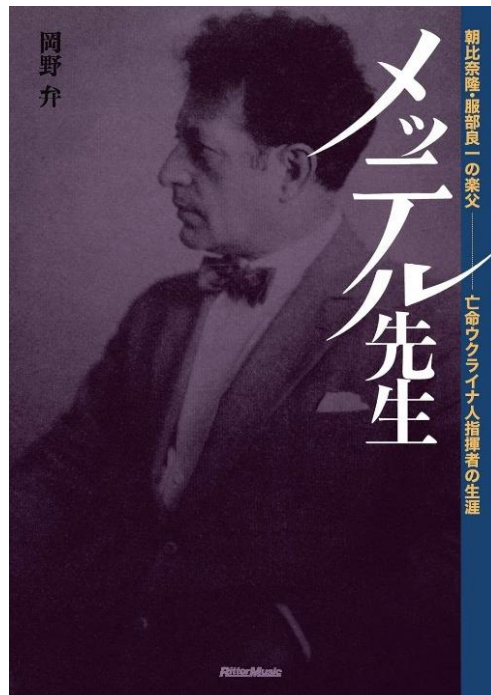
服部良一（1907～1993）

大正 15 年（1926）より約 4 年間
メッテルに師事。

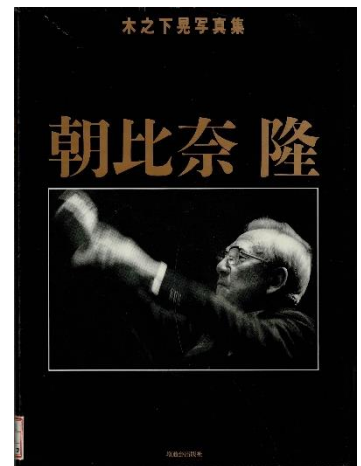
「東京ブギウギ」や「青い山
脈」等を作曲し、国民的作曲家
となる。



『ぼくの音楽人生 エピソードで
つづる和製ジャズ・ソング史』
服部 良一（日本文芸社、2023）



『メッテル先生 朝比奈隆・服部良一の楽父、
亡命ウクライナ指揮者の生涯』岡野弁
（リットーミュージック、1995）



『朝比奈隆 木之下晃写真集』
木之下晃（増進会出版社、1994）

朝比奈隆（1908～2001）

日本を代表する指揮者。

昭和 3 年（1928）より約 10 年間メッ
テルに師事。京都帝国大学を卒業
後、世界各国のオーケストラを指
揮。戦後は大阪フィルハーモニー
交響楽団を設立。

エマヌエル・メッテルと 二人の弟子

国民的作曲家の服部良一と日本を
代表する指揮者の朝比奈隆は、神戸
に住むウクライナ指揮者、エマヌ
エル・メッテル（一八七八～一九四
一）に作曲などを師事していました。
メッテルはロシア革命を逃れ、大
正一五年（一九二六）に來日、前年
開局した大阪放送局のオーケストラ
の指揮者に就任します。そこでフ
ルートを担当していた服部の熱心な
練習態度に目をとめ、個人レッスン
受講を勧めます。

またメッテルは京都帝国大学の
オーケストラも指揮しており、朝比
奈は彼を慕って京大に入学しました。

服部と朝比奈は中山手二丁目の
メッテルの自宅に通います。二人は
直接顔を合わせることはなく、メッ
テルは服部には「アサヒナサン、ヨ
イシキシヤニナリマス」と朝比奈を
引き合いに出し、朝比奈には服部を
引き合いに出して両者を叱咤激励し
たそうです。彼は後に深江文化村
（東灘区）に移り、戦争の影響によ
りアメリカに移住し生涯を終えます。
朝比奈はメッテルの勧めでプロを
目指し、服部は「先生の言葉はいつ
も影の如く響いて」と述懐するなど、
二人の歩む道を方向づけました。

*現在の NHK 大阪放送局
参考…『大阪音楽界の思い出』『この響き
の中に 私の音楽・酒・人生』ほか

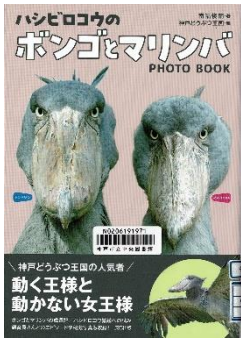
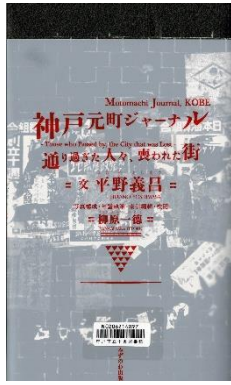
神戸元町ジャーナル 通り過ぎた人々、喪われた街 平野義昌文 柳原一徳写真構成他（みずのわ出版）

二〇一三年、元町の海文堂書店は九九年間の歴史に幕を下ろした。その元店員である著者が、元町文学史を軸に、かつて神戸の街に在った人々や街の記憶をたどる。

林喜芳、陳舜臣、池長孟など文化人を紹介し、その著作をひもくことで、彼らの目に映った元町の情景を鮮やかに蘇らせる。当時の新聞記事や地図、写真等の資料を豊富に掲載。海文堂書店や三宮ブックスをはじめ、個性豊かな書店の歩みにも触れる。

巻末には索引、関連年譜も収録されている。

表紙写真「相克」安井仲治（一九三三年撮影）二〇〇四年ゼランシルバープリント 名古屋美術館蔵



祭祀考古学の研究 続 大平茂（雄山閣）

祭祀考古学とは、祭祀遺跡と祭祀具から原始・古代人が神や靈魂と接していた精神状態（心理）を探究する学問。著者は兵庫県立考古博物館の元職員で、本書は前書の刊行（二〇〇八年）後に発表した論文、講演をまとめたものである。

第III編第3章「ひょうごの遺跡が語るまつりの古代史」では、県内で発掘された銅鐸や絵画土器、呪符木簡などの祭祀遺物の変遷を連続性や断絶という視点で整理・考察している。巻末に県内の祭祀遺物出土地一覧表あり。

ハシコロウのボンゴとマリンバ 南幅俊輔著 神戸どうぶつ王国編著（辰巳出版）

神戸どうぶつ王国で暮らすハシコロウ、オスのボンゴとメスのマリンバ。二羽の違いや暮らしぶりを、写真家・南幅俊輔氏が写真を通して紹介したフォトブック。

ハシコロウの繁殖に力を入れている神戸どうぶつ王国ならではの経験や取り組み、飼育員のインタビュも紹介されており、読み応えのある一冊となっている。

「ていねいな暮らし」の系譜 花森安治とあこがれの社会史 佐藤八寿子（創元社）

須磨区出身の花森安治は、昭和二十三年に生活雑誌の元祖ともいえる『暮らしの手帖』を創刊した。

本書は、この雑誌の特質と花森安治の人物探究を基に、時代の変化に伴う「ていねいな暮らし」の理想のイメージの変化について考察している。効率化が進む私たちの今の暮らしを見直すきっかけにもなるのではないかな。

第五章「神戸を歩く」では、当館も紹介されている。

妖精の物理学 電磁幽体（KADO KAWA）

二〇三二年、特定の物理現象が少女の姿で具現化した存在「現象妖精」が提唱され、世界は一変した。「現象妖精災害」によって、重力が反転した「逆さまの街・神戸」。そこに暮らす少年・カナエは、ある日、黒づくめの集団に命を狙われている謎の女の子と出会う。少年の秘密と彼女の正体。すべてが明かされたとき、彼らの逃避行は、隠された真実へと迫り着く。第三一回電撃小説大賞受賞作。

断簡 ある音楽学生の手と死 中林敦子（風詠社）

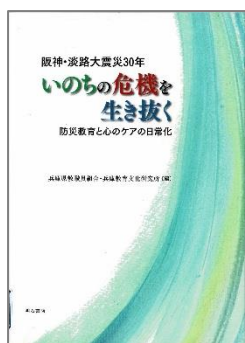
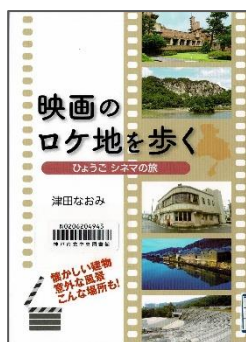
村野弘二は幼い頃から音楽に親しみ、神戸一中在学中は我流で作曲に熱中した。やがて音楽家を志し、昭和十六年に東京音楽学校（現・東京芸術大学）の「予科」に作曲科志望で入学するが、その翌年に学徒出陣で陸軍に入隊することになった。弘二の父・貞朗の手記を多く引用しながら、戦地フィリピンソン島で亡くなるまでの生涯を伝える。

著者は弘二の姪にあたる。平成二十七年に、彼の遺作となる音楽学校時代の楽譜とレコードが親族の家から発見され、デジタルアーカイブ公開に至った経緯も綴られている。



映画のロケ地を歩く ひょうごシネマの旅 津田なおみ（神戸新聞総合出版センター）

兵庫県内で撮影された映画六〇作品とそのロケ地を紹介する。取り上げる映画は、旧神戸新聞会館周辺で撮影した昭和のスター映画「夜霧のブルース」や旧グッゲンハイム邸を主人公夫妻の住まいとして撮影した近年の話題作「スパイの妻」など幅広く、海外作品も名を連ねる。ロケ地は自然の絶景や歴史的建造物だけでなく、元町の交差点や神戸駅など人々が日常的に訪れる場所も登場する。映画を通じて、兵庫県の魅力を再発見できる。



阪神・淡路大震災30年いのちの危機を生き抜く 防災教育と心のケアの日常化 兵庫県教職員組合・兵庫教育文化研究所編（明石書店）

震災を知らない世代が増える中、教育現場では経験の継承が、あらためて重要な課題となっている。

本書は、阪神・淡路大震災から三〇年を機に県内の教職員や研究者による実践と提言、被災当事者の声を集めた記録集。被災体験の語り継ぎ、いのちを守る防災教育、心のケア、3・11後の受け入れ教育の四テーマで構成されている。震災を「生き抜く」ための教育現場の取り組みが丹念にまとめられ、その経験と知見は、貴重な教訓として次世代に手渡されるだろう。

※東日本大震災により避難した子どもたちの受け入れ教育

その他の新刊Ⅱ

音がするのだった 玉川侑香詩集 玉川侑香（詩人会議出版）

モダン・ファッションのパイオニア 田中千代 本橋弥生（平凡社）

臨床研究イノベーション2.0 神戸医療産業都市の現在そして未来 橋田亨編集（メディカ出版）

神戸 その③④ あんな人こんな人

原 智恵子 はら・ちえこ 大正3年(1914) ~ 平成13年(2001)

原智恵子は^{くめたろう}大正3年に須磨で、川崎造船所で働く父・原条太郎と琴の師匠であった母・久子のもとに生まれました。7歳でピアノを習い始め、才能を開花させた智恵子は14歳で渡仏。努力の末、パリ音楽院ピアノ科へ入学します。フランス人ピアニストのラザール・レヴィに師事し、日本人として初めて主席で卒業しました。昭和7年に帰国しますが、昭和10年には再び渡仏し、世界的ピアニストであるアルフレッド・コルトーのもとで助手を務めて経験を積み、翌年にはパリデビューを果たします。また、昭和12年には第3回ショパン・コンクールに日本人で初めて参加し、聴衆賞を獲得。この聴衆賞は、注目と人気を集めた智恵子が入賞しなかったことから聴衆による暴動が起き、それを収めるために急遽贈られた賞でした。その後も国内外で精力的に演奏活動に取り組み、その色彩豊かな音色で人々を魅了しました。講師の依頼は断ることが多かった智恵子ですが、母や姉が卒業した神戸女学院大学では教授としてピアノを教えたこともありました。昭和34年には、20世紀を代表するチェリストのガスパー・カサドと結婚します。二人は「デュオ・カサド」としてデビューし、世界各地で演奏しました。夫が亡くなってからは「ガスパー・カサド国際チェロコンクール」の開催に尽力し、後進の育成に貢献しました。その功績から、昭和62年に^{くんととうほうかんしょう}勲三等宝冠章^{じょくん}を叙勲されています。

智恵子は海外では高く評価されていたものの、本人の性格や音楽的個性、日本音楽界の慣習的側面等から日本の楽壇と折り合いが悪く、その活躍はあまり評価されませんでした。しかし、国際的に活躍した日本人ピアニストの草分け的存在として、近年その功績が改めて注目されています。

【参考】『原智恵子 伝説のピアニスト』石川康子（バストセラーズ、2001）、『原智恵子』改訂版 寺崎太二郎（冬花社、2024）ほか



復元整備五〇周年 五色塚古墳

明石海峡を望む垂水区の丘陵地にある五色塚古墳は、令和七年（二〇二五）、復元整備から五〇周年を迎えました。

五色塚古墳は、古墳時代前期（四世紀後半）に築造された前方後円墳で、全長は一九四メートル、後円部の高さは一八・八メートルに達し、兵庫県内最大の規模を誇ります。地域のシンボルであると同時に、観光スポットとして年間三万人を超える人が訪れています。

文化財としては、大正十年（一九二一）に兵庫区の和田岬砲台などと合わせて県内初の国の史跡に指定され、平成二十四年（二〇一二）には出土した埴輪四八点が国の重要文化財に指定されました。さらに、神戸市指定有形文化財としても出土品三三八点が指定されており、考古学的にも非常に高い評価を受けています。出土品の多くを占める埴輪は土管状で江戸時代以降「壺」と呼ばれ、二千個以上が並べられていたと推定されています。それらが並ぶ姿から

五色塚古墳は別名「千壺古墳」とも呼ばれます。当館が所蔵している「播州明石舞子濱續垂水名所五色塚圖」等、江戸時代に描かれた五色塚古墳の絵図には、「○」や「●」が描かれていたものがあります。表面に見える埴輪や葺石と考えられ、当時からそれらが特徴的で、よく知られる名所だったのでしょう。

第二次世界大戦時に、五色塚古墳では樹木の伐採や食糧難による開墾が行われ、荒廃が進みました。昭和三十年代、周辺住民の保存要望も相まって、考古学者・坪井清足（一九二一〜二〇一六）によって復元構想が練られました。坪井は、同じところ建設



「播州明石舞子濱續垂水名所五色塚圖」（当館所蔵）

省で五色塚古墳周辺への建設が議論されていた、明石海峡大橋に着目します。古代の技術力を体現する五色塚古墳を築造当時の姿に復元整備し、現代の技術を集めた「夢の懸け橋」こと明石海峡大橋を一望して対比させようと考えました。

この構想が結実し、昭和四十年（一九六五）から始まった復元整備事業は、墳丘の形状や構造を綿密な発掘調査に基づいて復元するという、非常に先進的な取り組みでした。幸いにも墳丘は良好な状態で残されており、一〇年にわたる整備の末、昭和五十年に史跡公園として一般に公開されました。こうして五色塚古墳は、日本で初めて本格的に復元された古墳として、学界のみならず市民の関心を集める存在となりました。

復元整備により、三段構造の墳丘、周囲を巡る濠、埴輪列、そして表面を覆う葺石が忠実に再現されています。前方部の黒みがかった葺石は淡路島産で墳丘の上段と中段に使用されました。全体では推定約二二三万个の葺石が使用されています。また、墳頂部には強化プラスチックで復元された鰭付円筒埴輪や鰭付朝顔形埴輪などが並び、古代の葬送施設の様子を視覚的に体感できる空間になっ

ています。

頂上に登ることもでき、明石海峡大橋や淡路島を一望できる絶景が広がります。歴史と自然が融合したこの眺望は、古代への想像力をかき立ててくれることでしょう。

さらに、令和八年（二〇二六）春には、五色塚古墳の歴史的価値や復元の過程をより深く学ぶことができるガイダンス施設が開館予定です。

五〇年前の復元調査では、誰が埋葬されていたのか分かりませんでした。今なお謎に包まれた魅力を持つ五色塚古墳から、今後も目が離せません。



上：1955年代（約70年前）

右：現在

（神戸市文化財課提供）



参考文献
『国史跡・五色塚古墳のあゆみ』『史跡五色塚古墳小壺古墳発掘調査・復元整備報告書』ほか

世界をひろげる、ほんとの出会い。
神戸「水」の文化振興プロジェクト

リサイクル適性(A)

この印刷物は、印刷用の紙へリサイクルできます。